

農業気象技術対策資料

多雨・日照不足に関する農作物対策資料

平成27年9月11日（金）

愛媛県農林水産部農業振興局農産園芸課

【概要】

県内では8月中旬以降、低温・多雨・日照不足傾向となっており、向こう1ヶ月予報でも、気温は低い、降水量は平年並または多い、日照時間は平年並または少ない予報となっている。

現在のところ、農作物に目立った影響は見られないが、このまま日照不足が続けば、水稻のいもち病の発生や、野菜・果樹の生育遅延および品質低下などが懸念される。

【水稻】

1 今後の栽培管理

(1) 水管理

- 冷夏・長雨年の水稻は、日照不足で根の活力が低下するので、水を溜めたままでは根腐れが発生する。そのため、間断灌水や浅水管理など根の活力を低下させない水管理を行う。また、極端な水管理の変更は行わない。
- 登熟後半は徐々に水を少なくするが、土壌が乾燥すると心白・乳白粒の発生で品質が低下するので、決して土壌を乾燥させないように注意する。
- 落水はできる限り遅くして登熟を高めるようにするが、土壌や降雨状態等を総合的に判断して決める(一般的には収穫5日前を基準とする)。
- 湿田や排水不良水田等では溝切りやうら溝上げを実施し、灌排水が容易に行える状態にしておく。

2 病虫害防除対策

(1) いもち病

- 今後も日照不足が続くと、中山間地等でいもち病の発生が懸念される。
- 葉いもちの病斑を確認したら、直ちに治療効果の高いブラシン剤等で防除を行い、蔓延を防ぐ。
- 普通期水稻では、出穂期直前の定期防除を必ず行う。
- 穂いもちの有効防除期は出穂後2～3週間頃までとされるので、穂孕期、出穂期及び穂揃期の防除をした圃場でも、不順な天候が続く場合は傾穂期(穂揃期7～10日後)の追加防除を実施する。
- 降雨が続いて防除ができない場合、天候が回復してから防除するより、一時的な雨の合間や小雨時防除(雨中散布)の防除効果が高いので、穂孕期、穂揃期、傾穂期の防除適期を逃さないように防除する。
- 出穂後も天候不順が続き、上位葉にいもち病斑のみられるほ場では、出穂10～15日後の仕上げ防除に、いもち病の混合剤を使用する。

(2) その他

- その他病虫害については今後の予察情報に注意するとともに、圃場の観察調査により病虫害の適期防除を行う。

【大豆】

1 日照不足の影響

大豆に対する障害は、日照不足単体ではなく長雨等を伴うことで発生する。被害としては、生育遅延、生育量不足、莢数減少、粒肥大障害が挙げられる。

2 今後の栽培管理

障害の発生が懸念される場合は、以下の点に注意する。

○葉面が圃場を覆うのが遅れる場合は、雑草発生が多くなるので必要であれば早めに除草剤を処理する。

○茎葉が軟弱になれば、葉焼け病や、降雨等がこれに伴えば紫斑病の発生など主として病害発生が助長されるので、発生に注意する。

【野菜】

1 排水対策

畝溝や排水溝の整備や清掃を行い、雨水の速やかな排水に努める。

2 草勢回復

果菜類の草勢が低下した場合は、奇形果・不良果等の摘果や過繁茂した茎葉の間引きせん定、病葉除去などにより地上部の負担軽減を図るとともに、葉面散布や追肥を行う。

3 施設管理

ハウス内が過湿にならないよう換気を徹底する。

育苗施設では、軟弱徒長を回避するため、灌水は最小限にとどめる。

4 病害防除

日照不足によって軟弱徒長となり、施設内の高温過湿条件が重なると、灰色かび病などの病害発生が懸念されるため、早期発見に努めるとともに、発見後は、薬害の危険が少ない早朝や夕方の涼しい時間帯に、速やかに薬剤防除を実施する。

【果樹】

1 共通事項

(1) 排水対策

明きよ及び暗きよによる排水を行い、根圏土壌の排水に努める。また、排水路の点検を行い、雨水がスムーズに園外に流れるよう整備しておく。

2 かんきつ類

(1) 品質向上対策

○シートマルチの設置

9月以降のマルチ設置は、若干の増糖効果、浮皮軽減、着色向上の効果がある。近年問題となっている秋期の雨を園地より排除する。

○カルシウム剤散布

浮皮軽減や果皮強化のために、カルシウム剤を2、3回散布する。塩化カ

ルシウム・硫酸カルシウム水和剤は果皮の細胞壁を強くする働きがある。

○フィガロン乳剤散布

温州みかんの熟期促進（着色向上）、浮皮軽減対策として、フィガロン乳剤 2,000～3,000 倍で散布する。それぞれの散布時期は次のとおり。

（熟期促進）1 回目：満開 50～90 日後、2 回目：満開 70～110 日後

（浮皮軽減）1 回目：蚩尻期、2 回目：蚩尻期の 2 週間後

ただし、本剤の使用回数は 2 回以内。

（2）病虫害防除

黒点病の発生が助長されるため、ジマンダイセン 600 倍やストロビードライフロアブル 2,000 倍等（使用時期に注意）により防除を徹底する。

3 キウイフルーツ

（1）新梢誘引

日照不足による品質低下が懸念されるため、新梢の誘引やカット剪定等により、樹冠内や棚下の日照改善を図る。

（2）病虫害防除

果実軟腐病が発生する恐れがある。トップジンM水和剤 1000 倍、ベンレート水和剤 2000 倍、ベルコート水和剤 1000 倍等による防除を徹底する。

4 かき

（1）病虫害防除

炭疽病が発生しやすいので、ベンレート水和剤 2000 倍、オンリーワンフロアブル 2000 倍などを散布する。また、発病果や夏秋梢は重要な発生源となるので、必ず園外に持ち出す。

【花き類】

1 排水対策

排水路の点検を行い、雨水がスムーズに園外に流れるよう整備しておく。

2 肥培管理・水管理

日照不足では茎葉が軟弱・徒長気味になるので、窒素肥料は控えめにし、加里肥料を多めに施用する。

施設栽培では灌水を控え、施設内の湿度を抑えるよう努める。

3 葉焼け対策

曇雨天が続いた後に強光線に当たると、ゆり、ばら等は葉焼けを起こすことがある。特に施設内が高温となると発生しやすいため換気を徹底し、光量に応じて、きめ細かく寒冷紗などで遮光する。

4 は種・育苗

過湿になりやすく、蒸れや病害の発生を抑制するために、十分な換気と薬剤散布を行う。また、発芽・発根が始まったものは、乾燥気味に管理する。

5 病害防除

ゆり類の葉枯病、ばらのうどんこ病、灰色かび病、べと病、きくの黒斑病、褐斑病など、病害が発生しやすくなるため、防除を徹底する。